



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.126
2014.3.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

阿玉台式土器 - 東関東に花開いた特異な中期縄文土器 - 塚本師也

第12回

阿玉台式土器の変遷

ここでは阿玉台Ia式からIV式までの土器の系統的な変遷を辿る。

阿玉台Ia式土器には、平縁と波状口縁がある。波状口縁の土器は、頂部が尖る土器(第8図4)と平坦な土器(第8図3)があり、五領ケ台式の系統を引く。阿玉台Ib式古段階では、波状口縁の土器はほぼ消滅する。頸部が強く括れ、体部が張る器形に、波状口縁と波頂部下の渦巻文が僅かに残ると考えている。阿玉台Ib式新段階では、平縁の区画の接点部分が上方に伸び、波状口縁が復活する。体部が張る器形に、命脈を保った波頂部下の渦巻文が、波状口縁の頂部

下に進出する。以後波頂部下から直線的に隆帯を垂下させる土器(第8図12)と渦巻文を配す土器(第8図11)が並存する。体部が張る器形は、波頂部に皿状突起を付け、そこから渦巻文を垂下させるようになり(第8図10)、阿玉台II式まで続く(第8図15)。

阿玉台Ia式の平縁の土器は、隆帯と角押文がともに1周しない、狭い区画を配すものが多い(第8図1)。阿玉台Ib式に、口辺部、頸部、体部の三帯構成とともに、隆帯と押し文がともに一周する定型的な区画文が確立し(第8図8)、以後IV式まで続く(第8図21)。阿玉台Ia式には、平縁の区画境に、

やや間隔を開け、V字状突起や粘土棒を粘土帯で囲った突起を2個並列させるもの(第8図2)がある。この部分を上方に突出させて阿玉台Ib式に扇状把手が生成され(第8図6・9)、阿玉台II式まで存在する(第8図14)。このことは、西村正衛がすでに指摘している(西村1969)。

魚鱗状や粘土棒を粘土帯で囲った突起のみが見つかる土器は阿玉台Ia式からII式まで存在する。V字状突起が付く土器、無文もしくは地文のみの土器は全時期を通じて存在する。

阿玉式Ia式	阿玉式Ib式(古)	阿玉式Ib式(新)	阿玉式II式	阿玉式III式	阿玉式IV式
1	5	8	13	18	21
2	6	9	14		
3		10	15		
4		11	16	19	22
	7	12	17	20	23

第8図
阿玉台式土器変遷図
縮尺: 1/24

1. 千葉県加茂遺跡
2. 福島県法正尻遺跡
3. 新潟県城林遺跡
- 4・15 群馬県房谷戸遺跡
- 5・7. 千葉県水砂遺跡
6. 千葉県中山新田I遺跡
- 8・12・17 千葉県子と清水貝塚
9. 埼玉県亀居遺跡
10. 東京都木管中学校遺跡
11. 栃木県免ノ内台遺跡
13. 千葉県向油田貝塚
14. 茨城県陸平貝塚
16. 福島県大畑貝塚
- 18・21. 栃木県機沢遺跡
19. 栃木県湯坂遺跡
20. 茨城県宮後遺跡
22. 栃木県御城田遺跡
23. 茨城県中台遺跡

【参考文献】

西村正衛, 1969, 「千葉県小見川町木之内明神貝塚—東部関東における縄文中・後期文化の研究—その一」『早稲田大学教育学部学術研究』第19号

【出典】

第7~11回と同じ

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

■阿玉台式土器	阿玉台式土器の変遷	塚本師也 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイバレット・サイト(第119回)	宮島義和 …2
■考古学の履歴書	良き師・良き友に恵まれて(第14回)	渡辺 誠 …2	■考古学者の書棚	『古代遊牧騎馬民の国—草原から中原へ—』	濱野浩美 …3

考古学の履歴書

良き師・良き友に恵まれて(第14回)

渡辺 誠

16. トチやドングリ類の食習俗

先に記した桑飼下遺跡の発掘において多量の植物遺体を発掘し、主体を占めるトチやドングリ類の食べ方について、その民俗調査に集中することになった。そのうちドングリ類については桑飼下遺跡周辺でも聞き取り調査ができたが、トチについてはできなかった。

当然各地の民俗調査報告書については読み漁ったが、トチについてはいい例に恵まれなかった。この壁に突破口を開けてくれたのは、しばしば平安博物館に見えられた峰 巍氏である。同氏のお父さんの戦友の実家から、正月になるとトチモチが送られてくると言うことであった。そして鳥取県智頭町に聞き取り調査に出かけ始めたのである。いい御縁の恩恵を受けたわけである。

しかし調査が進むにつれて、話を聞かせてくれる年寄りはどんどん減少していることがよく分り、あせりを覚えたことであつた。少し詳しく記せば、由良川河口に近い桑飼下遺跡では、花粉分析ではトチの花粉は検出されず、それなりの地域まで採集に出掛けていたことが分かる。それでもその範囲は日帰り圏内と考えられる。トチに因む地名が各地にみられるのは、その名残であろう。しかし今ではトチモチ自体は、京都府下ではその最上流部の京北町でしか作られていない。良材として伐採され、どんどんその範囲が後退してきたのである。この京北町での調査には、当時関西大学の学生であった南 博史氏などが協力してくれた。こうした絶滅寸前の民俗調査には、川端敏史・小沢一弘氏にも大いに協力して頂いた。

そしてトチのように1属1種の植物と違い、ドングリ類は約20種もあり、おまけにアク抜きやの仕方も種類によって異なっている。もちろんこの習俗も衰退の一途をたどっており、大いにあせったのである。それでもアク抜き不要のシイ類を除き、

西日本に多いカシ類は水でさらすだけでいい。しかし東日本のクヌギ。ナラ類などは、これに加えて煮沸を繰り返すことも必要であり、ここにたどりついて、一安心と思ってしまった。すなわち種類差から地域差を生じていると思ってしまったのである。

しかし頻りに韓国へ出かけている江坂輝弥先生には、韓国ではすべて水さらしだけでドングリ豆腐をつくっていることを教えて頂いた。このことについては、後に名古屋大学へ移った頃に、慶應義塾大学と釜山大学との国際研究のチームができ、そのメンバーに加えて頂き、解決することができた。4回の訪韓で分かったのは、韓国は南海岸を除き、東日本と同様に落葉広葉樹林に覆われていて、ドングリ豆腐を作っているところを見学するとクヌギ類ばかりが使われていた。そして豆腐にする加工工程で重要なのは、粉碎し製粉することであることが分かった。製粉することによって水さらしのみでアク抜きができるということである。東日本ではドングリ豆腐を作らないし、粒のまま食べていたのである。このことを縄文時代について考えれば、磨石や石皿などの発達する縄文中期の前と後に当て嵌めて考えることを示している。

韓国ではドングリ食ばかり調べていた訳ではない。支石墓や古墳、山城も見て歩いた。木浦大学の貝塚や、東亜大学の靑島遺跡の発掘にも参加させて頂き、さらに全南地方の前方後円墳を見て回ったのは楽しい思い出である。

略歴

昭和13年11月18日 福島県平市大町(現いわき市)に生まれる
昭和32年3月 福島県立磐城高校卒業
昭和33年4月 慶應義塾大学文学部入学
昭和43年3月 同上大学院博士課程修了
昭和43年4月 古代学協会平安博物館勤務
昭和54年8月 名古屋大学文学部助教授
平成元年4月 同上教授
平成14年3月 同上定年退職、同上名誉教授
平成15年4月 山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで)
平成18年7月 日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)

隔月連載です。次回は石井則孝先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイスバレット・サイト 119

屋代遺跡群 ～ 長野県千曲市

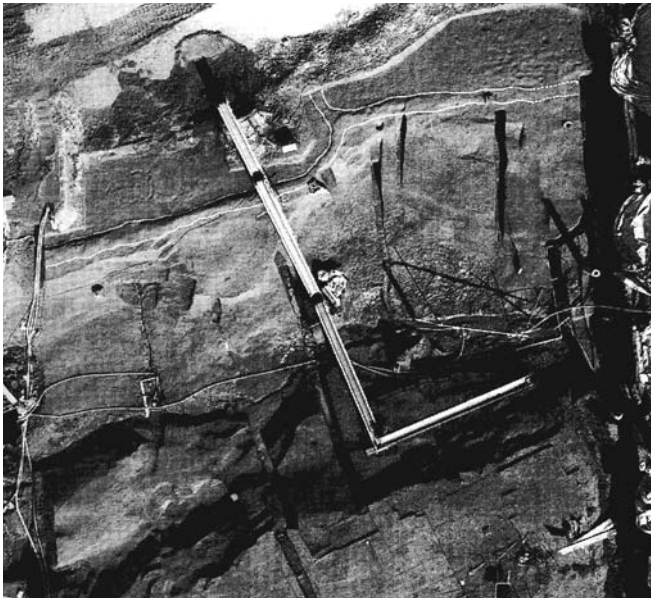
宮島 義和

上信越自動車道を上田方面から車を走らせ、トンネルを抜けきると視界が開けて千曲市の平らに入る、そこから更埴条里遺跡となる。長野県埋蔵文化財センターは平成3年より6年までの4年間、更埴ジャンクションに到達する2.3kmの区間を幅60mで発掘調査を行った。千曲川の後背湿地の水田地帯を更埴条里遺跡とし、南端のA区から自然堤防にかかるK区まで調査区を設定した。その北の自然堤防部は屋代遺跡群となり南端の①区から旧河川に落ち込む⑥区の調査を行った。

さて、騒ぎは平成6年の屋代遺跡群最北端の⑥区の調査で起った。千曲川旧河道に落ち込む部分であり、恐らく水田が

検出される程度で終わるだろうと踏んでいた。しかし掘ってみると旧河道に残された自然流路跡やそれにつながるように斜面に掘られた溝から大量の木器が出土したのである。

さてある日、都合で年休をとった翌日作業員さんたちは溝をきれいに削ってくれてあり、遺物だけが山に何て残されていた。その中に中央に孔のあいた小板があり「何だろう」と思って取り上げてみるとなんと裏に墨書があり、しかも「物部」とはっきり読めるのである。屋代遺跡群で木簡が出土した最初の瞬間であった。これは多くの木製品の中に木簡が混じっている可能性が高いということになり、板状のものが出ると目を



▲屋代遺跡群⑥区

凝らして観察するようになった。

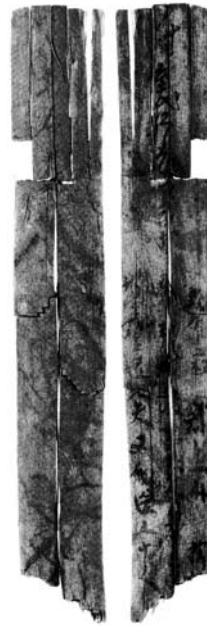
そしてその日は来た。「先生こんなものが出た」とタッパーの蓋の上に乗せられて大きな板が運ばれてきた。案の定木簡である。字がはっきりと読み取れる。しかしそれは完形品ではなかった。上部が幾つかに切断され、接合してみると真ん中のあたりの部品がない。ところが欠損したその下には「里正」と書かれている。私にも「里」が古代の行政単位であることは分かる。失われた部分には必ずや「里」の名前が書かれているはずである。なんて惜しいことだろうか。とにかく班長の寺内隆夫氏に報告し作業員さんを集めてすごい木簡が出土したことを報告した。タッパーの蓋を持つ手は小刻みに震えたことを覚えている。「それにしても一番おいしいところが残っていないなんて、まあこんなものかな」と思った。そして昼休みに入った。

弁当を食べながらそれでもどうしてあの部分だけがないんだろうかと解せない気持ちでいっぱいであった。

その日はたまたま作業員さんたちの健康診断の日で、午後1時から検診が始まった。私はその時ぱっと思った、「もしかし

たら廃土の中に！」私は無人の現場へ走った。

廃土場は午前中のままの状態であった。私はそこに飛び込みとにかく木のかけらを探した。最後の望みにかけた。すると切断されたとみられる木板片を発見した。すかさず取り上げ目を凝らすと字が書いてあることがすぐにわかった。私はプレハブに走り、先ほど出土した木簡の頭の部分に着けてみた。何と接合するではないか。接合して字を凝視する「符屋代郷長」と読み取れる、それが残りの「里正」へと続くのである。世に言う「郡符木簡」発見の瞬間であった。



▲郡符木簡

それにしてもラッキーだったのはその日が健康診断であったことだ。そうでなければすぐに発掘作業は始まり、木簡の破片は新たな土の下に埋もれていたことになる。まさに「奇跡の健康診断」であった。その後数多くの木製祭祀具が出土し、祭祀遺構も検出された。屋代遺跡群⑥区は5世紀中葉以降続く一大水辺の祭祀場であったことが分かった。

その後の赤外線による観察で木簡の数は増え続け、130点を越えた。中には7世紀後半のものも含み、全国的にも珍しい国符木簡が存在することが判明す

るとともに、軍団に関わるものなど多彩な内容をもち、官衙に関わる木簡群であることが推定された。そして祭祀も郡家などに関わる可能性が高まった。現在木簡及び木製品の保存処理が県立歴史館で行われ、来年には展示会が行われる予定だそうである。私は木器群の整理作業に携わり報告書を刊行した。これによって私の人生は大きな転機を迎えることになった。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは臼居直之さんです。

考古学者の書棚

「古代遊牧騎馬民の国 — 草原から中原へ —」

船木勝馬著／誠文堂新光社(1989)

濱野 浩美

匈奴、独自に鉄生産か 愛媛大など、モンゴルで炉跡発見

2013年11月、朝日新聞に掲載された記事である。モンゴル高原を中心に紀元前3～紀元後1世紀に亘って覇を唱えた遊牧騎馬民族、匈奴の製鉄遺構が、愛媛大とモンゴル科学アカデミー考古学研究所の共同調査団により発見されたという。中国の史書『二十二史劄記』によれば、漢代の匈奴に皇帝や皇后冊立に際して金人を鑄造する風習があったことが述べられている。匈奴による西方民族特有の製鉄炉の発見は、

まさにこの記述を裏付けるものである。この製鉄炉で匈奴は金人を鑄造して吉凶を占ったのであろうか。シルクロードならぬメタルロードによせる想いは尽きない。

考古学のみならず、歴史を考える上で日本とアジアとの関係は切り離して考えられるものではない。古くは、東北アジアの遊牧騎馬民族が朝鮮半島を南下し日本で農耕民族と化したという説など、考古学史に残る論が討議されてきた。しかしながら、遊牧騎馬民族に対して、私たち日本の考古学者は正確

に理解しているのだろうか。この謎多くそして浪漫あふれる遊牧騎馬民族について、原典解題を行いながらも、優しい日本語を用いて、簡明に説いてくれるのが本書である。構成は以下のごとき、紀元前1300年の殷代から、5世紀の五胡十六国時代まで、史書に僅かながら記載される古代遊牧騎馬民族が中原に国家を立てていくまでが述べられている。

目次

東胡の登場と分散

甲骨に刻まれた異邦人
 古典と金文が語る異民族
 モンゴル草原の争覇戦
 きゅうり・くるみ・ごま

烏桓・鮮卑の動向

中国の盾となった烏桓
 匈奴に変わった鮮卑
 烏桓人・鮮卑人の生活

長城を越えた鮮卑

遼西に展開した諸部族
 華北に進出した鮮卑
 河西回廊をめぐる攻防

拓跋部の中国支配

伝説時代から歴史時代へ
 代公から代王への道のり
 国号を魏と定めて
 内乱を乗り越え中原へ

漢民族は早くから北方異民族の侵入を受け、その対応に苦慮していた。すなわち中国の歴史は周辺民族との関係であり、アジアの歴史は南方の農耕民と北方の狩猟・遊牧民族との対立構造の歴史である。勢力抗争のなか、一方では官位を与え北方異民族招撫対策を行い、漢化政策に努める。中でも興味深いのは鮮卑系民族の動向である。

鮮卑系民族は、後漢の頃、匈奴の冒頓単于に敗れ、遠く遼東の塞外に逃れた東胡の一部族といわれている。この鮮卑系民族は87年、北匈奴を撃ち、モンゴリアの支配権を確立し、ある時は後漢に降り、ある時は後漢に反し、周辺異民族とも攻防を繰り返す。彼らについては『後漢書』に東方の倭人に魚を捉えさせたという記述がある。倭人の漁法が活用されたという記事は興味深い。著者は倭人＝日本人と即断する危険性についての根拠を提示して述べながらも、これが日本沿岸の漁民であるとすれば、2世紀段階で日本人は確実に鮮卑人と交流していたと推測する。さらに、多くの考古学者も目にする『三国志』倭人伝にみられる大人の記述は、同時代の匈奴・烏桓・鮮卑等の周辺民族にみられる大人と同じ概念で中

国側が認識したものだろうと述べる。

漢化政策とともに、夷を以て夷を制する中国の政策は、また異民族交流を盛んにした。慕容鮮卑はいわゆる歩揺冠がその部族名となった遊牧民族である。この民族は、北周を建てた宇文部と攻防し、285年には扶余を征した。この扶余の民万余人の徒民と漢人の流入により慕容鮮卑自体の定住化が進む。この結果、多数の漢人の流入や、中国的官制の積極採用などにより国家自体が漢化していく。この漢化政策は、同時に強大であった遊牧騎馬民族特有の文化を手放すことに繋がり、国力は衰退していく。この政策は現在も中国のチベットやウイグルに対する政策に通じるものであり、考えさせられる。

他方、多民族交流は生活・風習・思想などあらゆる文化融合を生み、それらを備えた人間が日本へも渡来する。慕容鮮卑が推奨した製塩・製鉄技術は日本に持ち込まれたであろうし、祖先ゆかりの河川のほとりで鬼神・天地・日月・星辰・山川などを祀る騎馬民族固有の祭典儀礼は古墳や祭祀遺構などにも通有する。

五胡十六国時代、鮮卑系民族は、北魏王朝の建設など中原に国家を形成する。万里の長城北辺で遊牧生活を営み、部族社会を形成していた騎馬民族が、農耕社会に基盤を置く漢民族を寇略していた時代から、南侵して中国を直接統治するようになり、ついには中国の伝統国家へと衣替えしていくのである。なかでも、北魏は西域伝来の仏教の保護奨励を行い、その文化は彼ら独自の文化と融合しながら日本へ伝わる。仏教美術で語られる北魏様式には騎馬民族固有の文化が息づいているのである。

考古学に携わるものとして常にミクロな視線とマクロな視点、これを持ち合わせないといけぬ。近年、膨大な調査報告をもとに他分野、多角的な視野からの総合的研究が進む。なかでも文献学との相互研究は飛躍的な進歩を遂げている。しかしながら、国外の文献資料の解題となると、史書をそのまま引用してしまいがちである。著者は、膨大な史書の羅列の中から、徹底した史料批判を行って史実を確認しつつ、歴史の流れを汲みとっていく。また、その記述には、書き手である中国人側の認識が必ず介在することを強く説く。盲目的に資料引用することの危うさを十分認識したうえで、史料批判し、そこから自論を形作っていくこと、常にそれを心がけなければいけないと痛感する。

近年、冒頭の記事のように遊牧騎馬民族に関する発掘調査件数も増加している。著者の描いた古代遊牧騎馬民の国の実態が明かされる日もそう遠くないだろう。シルクロードに対するあこがれを誰しも

もったことがあると思う。かく云う私も、現在の道に通じる一歩はそこにある。自分の基本に立ち返る時、必携の書がこの本である。

アルカ通信 No.126

発行日 2014年3月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801
 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp
 URL : <http://www.aruka.co.jp>